

蘇芳集

見るからに

青山

丈

水鳥へ歩いて池が円くなる
綿虫に手の届かない日もありぬ
葱買って葱の長さで家に入る
一枚の物で北窓塞がる
バス席の一番奥に七五三
見るからに見る程でない花八ツ手
行つたつもりの十一月の二つ三つ

かまつか

前田陶代子

水面打つ雨の大粒山廬の忌
傘に入るわが身ひとつの秋思かな
水草ただよふ秋冷の沼の面
採り溜めし零余子の色のつまらなし
野には野の日ざし十月桜かな
疲れややかまつかの赫すぎたるは
拭き上げし柱に木の香火恋し

やや寒

峰岸よし子

一念の色に出にけり鷹の爪
遠鳴や朝の味噌汁具だくさん
たれかれに未踏の老いや桐一葉
破芭蕉夜は月光を鳴らしけり
更けて夜の梨食む音と風の音
眠れねば繻く一書夜半の月
やや寒の寝返れば壁ありにけり

吾亦紅

宮尾直美

廃校に残る寄せ書き秋の風
誰にでも帰る家あり大花野
木の家に猫と暮してちんちろりん
遙かより子どもの声や木の実降る
猫が子を銜へて通る秋桜
ひとつ見しより蓑虫のここかしこ
吾亦紅愛でてきのふがふと冥し

石 蒔

八木下 末黒

石蒔や十一月のこゑ聞けば
日溜りの笑窪となりぬ石蒔の花
断崖に波駆け上がる石蒔の花
晴れ間欲し曇りつづきの石蒔の花
石庭の間合ひ間合ひの石蒔の花
一輪の石蒔ほのぼのとポンプ井戸
銭湯の坪庭暮るる石蒔の花

残 心

吉田幸敏

秋天の返してくれぬ竹とんぼ
世が世なら吟遊詩人秋高し
江戸菊や小屋掛けて幕紫に
誰もをらぬ背戸のひよどり上戸かな
木枯や武蔵鎧の実が真つ赤
柿の皮ゾーリンゲンを流れ落つ
残心や牡丹焚火の燠のいろ

さやけくて

小川 美知子

紙切れと思ふ秋日が落ちてゐる
コスモスがどれも黄色の日暮れかな
さやけくて昨夜の夢を人に言ふ
病室よりメールの届く十三夜
虫の夜の急須揺すつて茶を淹れる
秋蝶が膝のところを通りけり
空見つつ弁当つかふ神の留守

水草紅葉

木内憲子

鴟高音霽れてこの世のつまびらか
記念日といへば十月桜かな
秋蝶といふほどもなく小さく飛ぶ
桐一葉秘して語らぬ日のあれば
風濡れてくるゆふがたや穴惑
落葉はじまる日曜は美術館
誰彼の逝きて水草紅葉かな

七草めぐり

小島みつ如

海風に萩の乱るる括らねば
フェンス中朝日に光る花桔梗
鉢植ゑの撫子明り校舎前
抱きたし友の自慢のをみなへし
土堤うめ尽くしそろそろ葛に花
電車過ぐ路肩のすすき夕映ゆる
「おかへり」と藤袴さす奈良絵壺

ロダンの像

清水裕子

秋は佳し草踏むもよし水影も
ロダンの像みる人影も秋深し
ばらに秋空青ければ空に向き
茶房の扉開けば舞ひ込む落葉かな
秋草の丈の不揃ひ人病めり
残り蚊の声ひそひそと遠ざかる
影ふみのかげの重なる原爆忌

朝寒

下平直子

朝寒を言ひて短く別れけり
朝寒しシート白じろ洗ひあげ
柿干して隣家も似たる暮しぶり
濡縁にけふも客ある柿の家
虚栗踏んで身疲れ俄かなる
栗剥いて午後をしづかに過しけり
新米の花の匂ひに炊きあがる